

## サービスラーニングでの学び

社会福祉学部社会福祉学科 2年 正木 美由紀

活動先：NPO 法人 絆

ゼミ：村上 徹也 先生



「特定非営利活動法人 絆」での 12 日間のサービスラーニングを通して、①自分の成長と気づき、②活動を通して見えてきた地域課題や社会課題とその解決のための活動、そして③自分自身の今後の課題や抱負について報告する。

始めに、サービスラーニングを通して自分の成長と気づきについてまとめる。

12 日間のサービスラーニングで、高齢者や障害者のデイサービスを体験する機会があった。その体験の中で、自分では上手くコミュニケーションを図れていると思っていても、利用者の方からすると、声が小さかったり、曖昧な言葉を使うと聞き返されたりといったことがあり、当初は傷つくことが多々あった。しかし、活動日数を増す毎に「話すというコミュニケーションも楽しみの一つである」ということに気づく。利用者の方は、「絆」に来ることを生きがいや楽しみにしていた。「絆」という自分の居場所に行き、様々な人（他の利用者の方や職員の方、ボランティアなど）とふれあい、何気ない会話で共に笑い合うことが幸せを感じる瞬間だったのではないかと私は考える。これは、利用者側だけのことでなく、今回サービスラーニングの活動として参加した我々にとっても言えることである。最初あまり話してくれなかった利用者の方が、日数を重ねる毎に話す回数や内容が増えたとき、その利用者の方の新しい面が見えたようで、とても嬉しくなった。

しかしその反面、私は「利用者の方を知ろうとするだけで、自分自身のことを知ってもらおうとしていたのか」と思い、今回の活動の反省点でもあると考える。利用者のニーズや願いといったものに目を向けすぎて、利用者本人のことに目をあまり向けていなかった気がする。目を向けてなかった理由として挙げられるのは、コミュニケーションを図ることに不安（利用者の方に嫌われたらなど）に思ったり、怖がっていたのが原因なのではないかと考える。そういった気づきや反省を糧にし、これから先の実習などといった場面で生かしていきたい。

そして、自分の成長として挙げられるのは、「人見知りだと思っていた自分が、意外に知らない人とでも会話をすることができた」ということである。

サービスラーニングを行う前まで、人に自分から話かけることが苦手だと思っていた。しかし、活動中に「絆まつり」の宣伝や「絆」を地域の人々がどれだけ知っているのかを街角アンケートなどを行った。最初アンケートを取る時、なんて言って話かけたら良いのか分からず、職員の方からアドバイスをもらいながら、手探り状態でたくさんの人にア

アンケートの協力をお願いした。何人かには断られたりしたが、皆さん優しくアンケートに協力してくれた。不思議なことに、断られた記憶より協力してくれた方々や優しい言葉（「頑張ってるね」や「行けたら行くね」など）の記憶のほうが鮮明に覚えている。普段の生活の中で、街角アンケートを取ったり、チラシを配ったりといった地域の人々と触れ合う機会はないと思う。初めてそういったことを活動中にさせてもらい、とても貴重な体験をした。

その街角アンケートの際、「NPO とは何か」という質問を受け、まだまだ福祉というのは知られていないのだなと思うと同時に、福祉を学ぶ者としていかに人々に福祉という存在を知ってもらおうかということは、これから取り組むべき課題なのではないかと考える。

最後に、活動中に職員さんから指摘され、気づいたことがあった。それは、「職員さんの指示待ちばかりで、自分から動こうとしていたか」ということである。活動するにあたって、自分から前に進むことに不安や怖さを感じていたように、活動が終わった今気づくことができた。これからの実習などで、そういった不安や怖さを払拭できたらと考える。

上記の三点を踏まえて次に、活動を通して見えた地域課題や社会課題とそれを解決するための活動についてまとめる。

サービ斯拉ーニングの中で、「絆まつり」を地域の人々に知らせる為、行政を訪ねてポスターを児童館などといった施設やショッピングセンターに貼ってもらおうとした。その時、ポスターといった宣伝や広告を貼るにも様々な手続きが必要であり、大変だった記憶がある。そういった点で「NPO 法人の宣伝などのしづらさ」といった問題が発生している。地域の人々に NPO 法人という存在を知ってもらうには、もっとオープンにすることで福祉や NPO を知らない人々に知らせることができるのではないかと考える。

最後に、自分自身の今後の課題や抱負についてまとめる。

上記にも書いたように、私は人とコミュニケーションを取ることを不安に思い、自分から踏み出す勇気がなかったのではないかと活動中に自分自身のことを知るきっかけにもなった。きっと誰しも不安や怖さというものはあるが、それに負けていては何も始まらない。「失敗を恐れず、やってみる」ということ「自分から動く」ということも必要になってくる。職員の方の指示を待つだけでなく、自分たちで考えて動くことの必要性を今回の活動を通して再認識することができた。

そして最初にも述べたが、今回のサービ斯拉ーニングを通して、利用者の方のことばかりを知ろうとするだけでなく、自分をさらけ出す（知ってもらう）ことも大切であり、信頼関係を築く第一歩なのではないかと考えた。知ってもらおうと言葉だけを使うのではなく、自分を知ってほしいという姿勢と取ることも大切である。

これらのことは、実習などだけでなく日常生活でも実践できることだと私は考える。交友関係でも実際、自分の素を出していかなければ相手も素を出せないと思う。そういった素をさらけ出せる関係が、良い交友関係を築けるのではないかと考える。

以上のこれらを今後の課題にし、学校生活や日常生活に生かしていこうと思う。